

統計的にみた天保期名古屋の医師像

山内 一信

はじめに

名古屋の町医師姓名録は寛政八年から元治慶応年間にかけて七冊に著わされている。そのうち天保五甲年（一八三四）の『醫家姓名録』^(一)は町医師二代目野村立栄が天保五年二月に起筆し、同年十月八日収筆したものである。本書には御用懸、御目見得、一段席、二段席、三段席、町組医師の順に姓名、出身地、父名、修業年月、教授師名、専攻科、住居が記載されている。書き方は人物により詳細なものから簡略化されたものまで種々みられるが、概要はつかむことができる。本稿ではこの『醫家姓名録』を資料とし、各項目について統計的に解析し、幕末時、名古屋の町医を主体とした医師像について検討する。

一 結果および考察

表一（本稿末に掲載）に本書に登録されている医師二三七名の氏名、出身地、親名、入門および老人立年、師名、専攻科を原本の順序に従い示した。以下の項目はこの表を基に分析したものである。図一に代表的な実例を二段席医伊藤圭介^(三)（表一91、以下医師名下の番号は表一内の医師番号を示す）、および三段席医東方令達^(四)（表一147）について示す。表一の見

(一) 父および出身 (表二)

医師の出身は父の職業および出身地から推測して、医家、武家、農家、商(工)家、その他(不明を含む)に分類することができる。医家出身者は一二七名で、全体の五四パーセントと半分以上を占め、農、商(工)、士と続いている。勿論農家、商家といっても名字を有している比較的よい家柄の出身者も少なくはない。^(四、六) 武家では藩士の家来で次男とか弟、あるいは百人組同心、御先手同心、御徒格小普請といったような比較的身分の低い武士が町医となっていたようである。医家出身者の中で二代目は六二名、三代目二八名、四代目一〇名、五代目一二名、六代目三名、七代目八名、八代目一名、九代目二名、十二代目一名であり、二代目は四九パーセント、三代目以上が五一パーセントと代々医家をなしていたものも少なくはない。これらのうち、養子であることが明記されているのは一五名みられたが、それ以外に医師の姓と父の姓とが異なるものもあるので、実際には養子をとっていた医家はもっとあったと思われる。医家を絶やさない努力がなされていたようである。

表二 一段席別出身別医師数

出身	官位					計
	御用懸	御目見	一段席	二段席	三段席	
医家	一一	一一	一六	五三	二六	一〇七
武家	二	三	二	七	一〇	二七
農家	三	六	四	六	九	二七
商家			四	四	六	一〇
その他				一	四	五
計	一六	二〇	二六	七一	五五	一三七

ただし医家出身一二七名の中には御用懸で一名、一段席で三名、二段席で二名が農家から、二段席で一名が武家から、医家に養子となっているが、この場合には医家に含めた。

ていたようである。

(三) 師 (表三)

入門した師の氏名が二回以上記載されているものを多い順に表三に列挙した。もっとも多かったのは浅井平之丞^(一〇)で一七名と多く、次いで菅屋順詮九名、神波船樹八名と続く。浅井平之丞は藩主徳川継友が享保十年(一七二五)に京よりわざわざ迎えた名医浅井東軒から四代目の貞庵である。浅井家は代々名古屋の医師の都督となつて、医療界を取り締まり、医師になるための試問も行って^(一)いた。そのため弟子達も多くなったことは必然

表三 師と門人数

門人数 (人)	師名
一七	*浅井平之丞
九	菅屋順詮
八	神波船樹
七	*吉田玄覚
六	岩田公澤
五	*柴田龍溪
四	*浅野春道
三	喜多川隆先
二	浅井宗達
	加藤道一
	奈倉中庵
	*石井隆庵
	岡本杏叟
	永坂周二
	沼波仲達
	守田意推
	田中倉吉
	永坂養二
	神波瑞景
	大鶴活庵
	*小鹿淳庵
	中西橋造
	井上專庵
	神波首七
	沼波周達
	*林良澤
	香川太冲
	永坂順治
	花岡隨賢
	宮田隆輔
	河合秋山
	竹内寿山
	*大河内存真
	沼波橋翁
	江馬春齡
	桜井養益
	舟橋貫道
	*平野春策
	龜井宗達
	永野徳元
	花田良助
	山田梁山
	長東家元
	*勝田三雪
	馬嶋大智坊
	岡田正弼
	柴田洞元
	丸淵仲山
	*山碕專三
	河田主計
	花田道庵
	山本恕助
	野村立栄
	伊藤玄澤
	吉益周助
	賀川玄悦
	竹野正卓
	八木養碩
	井深玄碩
	河田東作
	西山玄道
	箕浦祥貞
	和田桃山

*は尾張藩医

の事のように思われる。また一方では小野蘭山の流れをくむ浅野春道、大河内存真、菅屋順詮、岡田正弼、西山玄道らも一派を形成していたようであり、これらの先人達は伊藤圭介(91)らが幕末時種痘所や明治三年頃に名古屋藩に病院設立の建議をする源流になっていたように思われる。

師のなかで尾張藩医であったものは、浅井平之丞、柴田龍溪、小鹿淳庵、吉田玄覚、勝田三雪、平野春策、石井隆庵らであり、これらの藩医にも武家以外のものが多く入門しており、子弟関係を結ぶ上であまり身分上の差異は関係しなかったようである。また名古屋以外の師への

入門者もみられ、京の吉益周助に四人、

賀川玄悦および加藤道一にそれぞれ三人、香川太冲に二名、その他にも京への就学者は比較的多かった。大垣の江馬春齡には三人、紀州の花岡随賢には二人と関西方面への修行が通常であり、江戸への修行者は二名みられたのみであった。

前項で述べたように父が医家であったものは一二七名であり、そのうち七一名(五六パーセント)は実父または祖父、

兄、伯父が師であり、一一名は養父が師であった。養父が師というよりも、みこまれて養子になった結果であろう。入門した師の数は師一名のものは一四八名（六四パーセント）、師二名のものは五七名、師三名のものは二〇名、師四名のものは六名で、通常一名であったが、修業途中に師が病死した場合には他の師に入門した。なかには五人あるいは七人の師に入門している医師もそれぞれ一名ずつみられ、勉学の熱意もうかがわれる。

弟子が師をどのように決めるかについては興味をもたれるが、本書にはその経緯についてはほとんど記載がない。もちろん父あるいは縁者が弟子取りを許された医師であれば、前述のように、そこへの入門が多くなる。また山田玄案(47)の項に「私儀 生所笠松御郡代御支配所美濃中島郡三柳村山田玄視倅にて祖父同姓玄知より御医師高橋玄仙様三代相伝の門人にて寛政十年六月入門 文化二丑十二月老人立 文化八未二月廿六日三段 文化十酉三月廿日二段 文政三辰三月廿九日一段」とあるように祖父から三代にわたって師とのつながりのある場合もある。これは特別な例としてもなんらかの関わりがある場合が多いと想像する。ただ名古屋以外の郡部出身者、たとえば箕浦祥貞(29)、伊藤春甫(120)、山本佳一(121)、浅野泰二(171)、林道栄(182)、伍明天助(229)、林宗二(230)らにみられるように、出身地の郡または村に弟子取りを許された医師がおれば、まずその門をたたいたことが推察される。

(四) 修行年数 (表四)

修行年数は入門年月から老人立年月までの期間を求めた。月が記載されていない場合が多かったので年単位で算出すると、平均値は一〇年五ヵ月(標準偏差三年四ヵ月)で、九年修行者が四九名、一〇年が二二名、一一年が一八名、一二年が一二名と、九から一二年の修行者は七〇パーセントであった。なかには五、六年と短いものから、二〇、二八年と著しく長いものまで見られた。医師になるための修行年限は明治三年に出された一人立療治願の届から判断すると一〇年以上が規定となっていたようである。この頃の修業年数も一〇年(九年年数ヵ月は一〇年とみなす)を一応の目安としたよう

(六) 試問

試問については浅井平之丞が取り締まりをしていたわけであるが、興味ある記載が岡田宗順(235)の項にある。

「町組 岡田宗順 十月一九日 老人立 御免 天保五甲午年十月廿一日 生所犬山名栗町 元家中ノ悴内々出居

十月十七日夜試問有 故神波延仲宅 年番三人出 三四方承候所 相応ニ行届候旨相達十八日未前也 同十九日御免

廿日酒配壱升持参未下也

文政八酉九月賀嶋道圓様入門 剃髪天保四巳九月 大久保修治入門 岡田豊蔵剃髪改名宗順也

支配勘定役頭

住居上宿泥町 御条□領也 柳川兵治 借家ニテ鈴木玄詢隣也 当時独者也 当午三十才也」

この意味は、「試問は三人の係りの者が三、四問試問し、老人立御免となつたので、酒を持参し筆者のところへ報告にきた。岡田宗順は賀嶋道圓および大久保修治の二人の師に入門し、九年一ヵ月の修行の末一人前になつたが、まだ借家住いで、年は三十歳である」ということになるか。ここからは試問は十月に行われているが、必ずしも浅井平之丞が直接していたことを示してはいない。

まとめ

天保期名古屋の町医師数は人口に対する比率からは現在よりもむしろ多かつた。これらのうち医家出身者は五〇パーセント余りであつたが、下級武士や、農、商家から医師に転じたものも少なくはなかつた。師の数は浅井平之丞ら名古屋在住の医師が多かつたが、中には京を中心とした関西に師を求めるものもみられた。また師は通常一人であつたが、数名の師に入門したものもみられた。医家出身者の師は実父であることが多かつた。修行年数は平均十年五ヵ月であり、ほとんどのものは本道を専攻した。浅井平之丞ら漢方医への入門者が多く、蘭方を学んだものは二名であつた。この時代の名古屋

屋医学界は漢方主流であったが、一方では、天保期は明治維新に向かつて西洋医学に流れが変らんとする芽生えが出てきつつあった時代ともとれる。

文 献

- (一) 野村立栄『天保五甲午年二月醫家姓名録』名古屋、一八三四(天保五年)。
- (二) 安藤次郎「尾張蘭方医の始祖 野村立栄」『文化財叢書 名古屋文化史談第二集』第六五号、一六〇二頁、一九七五(昭和五十年)。
- (三) 『名古屋市史』「人物編第二 伊藤圭介」五一四頁、一九三四(昭和九年)。
- (四) 山内一信「化政天保期の書家医家―東方令達―」『郷土文化』四一巻、二九〇三四頁、一九八六(昭和六一)。
- (五) 『愛知県史別巻』「尾張藩諸役人御役名座席順」六一〇～六二〇頁、愛知県、一九三九(昭和十四年)。
- (六) 松平昌夫「尾西市医師会前史」『尾西市医師会三十年史』一～一八六頁、尾西市医師会、一九八五(昭和六〇年)。
- (七) 大田益三『幕末維新尾張藩醫史』「藩醫及び町醫」一三〇～一三三頁、名古屋市醫師會、名古屋、一九四一(昭和十六年)。
- (八) 大野一英「文武の町、文芸の町」『広小路物語』六法出版社、名古屋、一九七六(昭和五一年)。
- (九) 『一九八七年度医療行政要覽』五二九頁、医療行政資料調査センター、一九八七(昭和六二年)。
- (一〇) 『名古屋市史』「人物編第二 浅井貞庵」四六二頁、一九三四(昭和九年)。
- (一一) 『尾張名所図会附録』(小治田之真清水)一〇二～一〇五頁、愛知県郷土資料刊行会復刻刊行、一九七一(昭和四六年)。
- (一二) 『稿本名古屋大学医学部百五拾年史』三頁、名古屋大学医学部、一九八八(昭和六三年)。
- (一三) 『一宮市史資料編』五四六〇号(明治三年)、一人立療治願の届。
- (一四) 茶谷悟郎『平田地域にみる幕末の村方医師―亀崎村医師願達留を中心として―』一一頁、一九七六(昭和五一年)。

(名古屋大学医学部附属病院カルテ部)

表一 『天保五甲醫家姓名録』にみられた二三七名の医師達

番号	氏名/世代	出身/親または縁者名	学歴	教授名	専攻科
御用懸醫師					
1	丸淵仲山	中嶋郡下丸淵村 小兵衛	安永二入門 天明二入門	井上専庵 京賀川玄悦	産本
2	中西橘造	駿州益津郡長楽寺村 中西甚五左衛門	天明六入門 天明七入門 天明八入門 寛政四願	駿州赤坂祐達 駿州甲田春適 *駿州佐々木元龍 浅井平之丞	針外本
3	桜井養益(巳)	海老屋町 桜井養益	安永九入門 寛政元願	父桜井養益	本
4	河合秋山(巳)	森田八郎右衛門	天明八入門 寛政四十二 享和元老入立	小鹿周達 河合秋山 京吉益周助	
5	奈倉中庵(六)	奈倉中庵	天明四入門 寛政八老入立	父奈倉中庵 井上専庵	本
6	松枝春江	御黒門組同心 木村新右衛門	天明四入門 寛政八老入立	父沼波橘翁 大垣江馬春齡	外本
7	沼波仲達(二)	小鹿周達改名 沼波橘翁	寛政六老入立	父浅井宗達 沼波周達	本
8	浅井宗達(二)	浅井宗達	寛政九 寛政十 寛政十二老入立	*沼波周達 勝田三雪	針
9	山田貞石(四)	山田梁山	文化二 文化四老入立	父山田梁山 京香川太沖	本本
10	永坂周二(二)	永坂順治	寛政十二老入立	永坂養二	本外金
11	河田宗達	石河伊賀守家来 河田伴蔵	明和七入門 安永七 天明二老入立	*大河内存真 長東宗元	本小
12	若山東庵	海東郡津島村 若山春男	寛政元入門 寛政六願	沼波橘翁	外
13	壺井宗俊(二)	三州足助八幡宮社人 成瀬左京弟	寛政二入門 寛政十二願	亀井宗運 養父壺井楽翁	本外
14	伊藤玄澤(五)	勢州三重郡日永村 清水吉庵弟		四伊藤玄澤	
15	馬嶋考眼	岐阜 馬嶋大智坊元英	安永八 天明元	父馬嶋大智坊	眼本
16	渡辺玄二(二)	児玉玄通	明和四願	父児玉玄通	本

御目見得醫師	菅屋順詮	父菅屋順琢	本
17 菅屋順詮(二)	菅屋順琢	天明元老入立 天明八入門 天明二入門	本
18 永野徳元	山澄淡路守家来 安藤六〇衛	天明二入門 寛政二老人立	本小
19 柴田洞元	愛知郡山崎村 江崎与右衛門	天明七入門 寛政三願	本小
20 小見山宗法 (七)	小見山宗法(六)	寛政十一入門	本小
21 喜多川隆先 (二)	喜多川隆先	寛政五老人立	本本
22 河田東作(四)	河田主計	文化元老人立	本本
23 守田意推(五)	守田意推(四)	寛政二老人立	本本
24 奈倉道庵(九)	奈倉道庵	安永七老人立	本本
25 竹内寿山(三)	竹内寿山	寛政十二老人立	本本
26 杉村尚策(二)	杉村尚策	寛政三入門 寛政十二入門 享和三老人立	本本
27 船橋貫道	春日井郡岩崎村 貞四郎	寛政十入門	本本
28 竹野正卓	黒御門同心 竹野佐治右衛門	文化四老人立 天明二入門 寛政二老人立	本本
29 箕浦祥貞	濃州安八郡神戸村 惣十郎	天明二入門 寛政二老人立	本本
30 春山玄長(三) 養子	御徒士役 井田清左衛門弟	天明四入門 寛政八老人立	本本
31 井深玄碩	海東郡蟹江本町村 甚七	幼年 寛政二入門 寛政五老人立	本本
32 浅野文達(二)	浅野文禎	寛政元入門 寛政十一老人立 享和元	本本
33 平出順益	広井村内屋敷 半左衛門	寛政三入門 文化二老人立	本本
34 加藤敬順	濃州土岐郡多治見村 浅七	寛政九入門 寛政十一入門 文化四老人立	本本
35 高田正敬	小普請組 高田忠平	寛政六入門 享和三老人立	本本

御目見得醫師

菅屋順琢

父菅屋順琢

本

山澄淡路守家来

大河内存真

本小

安藤六〇衛

平野春策

本小

愛知郡山崎村

林良澤

本小

江崎与右衛門

浅井平之丞

本小

小見山宗法(六)

浅井平之丞

本小

小見山宗法(七)

父喜多川隆先

本本

喜多川隆先

父河田主計

本本

河田主計

守田意推

本本

守田意推(四)

父奈倉道庵

本本

奈倉道庵

父竹内寿山

本本

竹内寿山

西山玄道

本本

杉村尚策

菅屋順詮

本本

春日井郡岩崎村

河合秋山

本本

貞四郎

河合專吾

本本

黒御門同心

浅野昌益

本本

竹野佐治右衛門

同村林建仲

本本

濃州安八郡神戸村

沼波周達

本本

惣十郎

兼康友林

本本

御徒士役

伯父早川秀悦

本本

井田清左衛門弟

山崎專三

本本

海東郡蟹江本町村

浅井平之丞

本本

甚七

林 龍澤

本本

浅野文禎

柴田龍溪

本本

広井村内屋敷

竹内寿山

本本

半左衛門

浅野春道

本本

濃州土岐郡多治見村

浅野春道

本本

浅七

浅野春道

本本

小普請組

浅野春道

本本

高田忠平

浅野春道

本本

36	岡田正弼(一) 養子	田中儀庵	天明二入門 寛政四老人立 天明八入門	大河内存真 浅井平之丞 馬嶋大智坊 養父岡田守全	本小 産眼
一段席醫師					
37	井上專庵(四)	井上專庵	寛政五老人立 明和四 安永三入門	父井上專庵	本
38	藤 左龍(三)	藤 蘭宇	安永七老人立 天明四入門 寛政五老人立	父藤蘭宇 京山脇道作 京賀川玄悅 小野蘭山	本本本 産
39	野村泰順	海西郡平島新田 伝四郎	寛政十老人立 文政三入門 天明六	小鹿淳庵 神波船樹 石井隆庵 大河内存真	針
40	関 春萃	橘町 源治	寛政十老人立 文政三入門	父宮田玄喜 浅井平之丞 京畑立安	
41	岡野春林(三)	岡野春達	天明六 寛政十二老人立	岩田公澤	
42	宮田隆輔(七)	広井村下納屋町 宮田玄喜	天明四入門 天明五老人立	父野村立榮	本外金
43	小川宗徳	御歩行格已下小普請 比江井仁左衛門	寛政二入門 寛政八老人立	京 原田祐新 勝田三新 柴田洞元	針
44	野村立榮(一)	野村立榮	寛政三 文化三老人立	父岩田公澤	本小
45	本多春承(一)	広井村 半六	文化三入門 文化十老人立	高橋玄仙	本外
46	岩田公澤(一)	岩田公澤	文化元 文化八老人立	父花田良助 京 谷萬六	本
47	山田玄案(三)	濃州中島郡三柳村 山田玄視	寛政十入門 文化二老人立	父花田良助 京 谷萬六	
48	花田恕助(一)	花田良助	安永七 寛政七入門 文化八老人立	父花田良助 京 谷萬六	
49	石川立安	三州碧海郡大浜村 八右衛門	天明五老人立	小鹿蘭溪	
50	長東宗元(三)	愛知郡御器所村 彦七	享和元入門 文化八老人立	養父長東宗元	
51	桜井桂二	建中寺門前町 桜井栄左衛門	寛政元入門立 文化六老人立	吉田玄覺	

69	68	67	66	65	64	63	二段席醫師		62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
馬嶋松澤(九)	勝崎玄齡 (養子)	野村立德(一)	桜井養甫(二)	亀井宗運(五)	竹内尚民(三)	河村才兵衛			加納龍元	村瀬立斎	渡辺周意	松井岱良	加藤健次郎	田中倉吉(六)	奈倉道伯(七)	井上良周(二)	丸淵敬中(二)	永坂多仲(二)	山口玄瑞(七)
馬嶋松澤	濃州海西郡野寺村 宇野作右衛門	野村立栄	亀井宗運	御馬廻り組 甥河村孫四郎 竹内寿山	御馬廻り組 甥河村孫四郎	御馬廻り組 甥河村孫四郎			加納徳左衛門 百人組同心	濃州上明智村 村瀬平次郎	日置村 渡辺遜玄	杉出町 薬種屋長八	上材木町 川方屋長右衛門	田中泰庵	奈倉中庵	海西郡鯛浦村 宇佐美孫左衛門	丸淵仲山	永坂順治	山口玄篤
	寛政六 文化二	寛政十一 文化七 文化二	寛政七 文化六 文化二	寛政六 文化七 文化二	寛政七 文化六 文化二	寛政六 文化七 文化二			文化十一 文化二 文化二	文化十三 文化二	寛政五 享和二 文化二	天明六 寛政七 寛政七	文化八 文化六 文化八	文化二 享和元 文化二	文化二 文化十 文化十	文化八 文化四 文化十	文化八 文化四 文化十	文化十一 文化五 文化六	政寛七 文化五 文化五 文化六
父馬嶋松澤 兄小笠原定菊 養父○道範	大垣江馬春齡 野村立栄 養父勝崎昌庵	父野村立栄 父野村立栄	桜井養益	父竹内寿山	長東宗元	長東宗元			竹野正卓	神波船樹	林良澤*	中西橘造*	浅井平之丞*	京 賀川撰津介 丹州三上順道 *吉田玄覚 紀州花岡隨賢	兄田中儀庵 和田桃仙	井上有益	父丸淵仲山	父永坂順治	濃州吉田玄意 *岩田公澤 石黒通玄
眼本	本外 針	医学 本外金		本	本外	本外			針本	本小		針本	本外 本	婦	本小		本産	金外本	外 本外金

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
新美慶翁	橘柳新	長上左門治 (治)	古橋春龍	宇都宮尚山 (二)	加藤春林(二)	田宮春登(四)	宮崎宗仙(三)	岡本文亨(二)	宮田文吾(八)	小林常元(二)	永野分徳(二)	香川昌庵(二)	大久保修治	神波延仲(二)	春山玄杏(四)	後藤大助(三)	松井進二(三)	永坂泰二(二)	藤蘭宇 (三)	稲田嘉門
忠治郎	知多郡桂村	海西郡赤日村 清左衛門	古橋惣左衛門 春日井郡吉根村 源四郎	御先手同心 宇都宮久雅	加藤春林	竹内寿山	御役割○組同心 服部武右衛門	岡本杏叟	宮田隆輔	小林玄斗	永野徳元	香川昌庵	濃州大野郡大野村 大久保新次郎	春山玄長	春日井郡下原村 長江三左衛門	中島郡本神戸村 久蔵	藤左龍	船入町 清三郎		
天明三入門	文化十耆人立 享和二入門	文化三耆人立 寛政十一入門	文化二耆人立 文化二耆人立	寛政十一入門 文化八耆人立	文政二耆人立	文政元願	文政元耆人立	文政元耆人立	文政元耆人立	天明六 享和二耆人立	文化五 文化十四耆人立	文化三入門 文化十三耆人立	寛政十 文化四	文化八入門 文政三耆人立	文化十三耆人立 文化三	寛政三入門 享和元耆人立	寛政八入門 享和三願	文化元入門 文化十耆人立	文化十一耆人立 文政三入門	文化九願 文化三
養父新美又玄	岡田正弼	松井岱良 長上昌達	川嶋尚達	井上専庵	父加藤春林	竹内寿山 龜井宗運	神波船樹	父岡本杏叟	父宮田隆輔	父小林玄斗	父永野徳元	江戸丹羽良純	濃州河田倉部 河田東作	養父神波船樹	父春山玄長	吉田玄覚 叔父後藤玄意	永坂養二	父藤左龍	八木養碩	浅井平之丞 *柴田龍溪
本	本小	外本	本針	本	外本	本小	本小	本小	本	本外	本	本	本小	本口中	本外	本	本外金	本	本	

106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91				
永坂養二(四)	中村常之進	永坂順治(二)	水谷俊貞	岡部良貞(三)	守田淳介(六)	花田鳳助(三)	中嶋松山(二)	奥田貞仙(二)	山縣泉庵(二)	松枝東庵(二)	岡田玄杏(三)	浅井常儀	藤波隆山	竹野春達	伊藤圭介(一)				
永坂養二	和泉町 中村檢梗	永坂順治		岡部良貞	守田意推	花田恕助	中島白意	奥田巴良	町医師 山縣喜左衛門		岡田正弼	浅井逸治	元野四郎左衛門 御持筒同心	百人組同心 松山茂右衛門	西山玄道				
文化四寄宿 文政三養育 文政六老人立	文化八人門 文政二老人立	文政二老人立		文政六老人立 文政十一人門 文政六老人立 文政六人門	文政六老人立	文化十 文政五人立	文化九老人立	文化十一老人立	天明七人門 寬政十老人立	文化十 文政五人立	文化九 文化十二老人立	文化七 文化二老人立	寬政九人門 文化三老人立	文化九人門 文政四老人立	文化七 文政三老人立				
父永坂養二 永坂周吾	中西橋造	父永坂順治	桜井養益 京賀川玄吾	大垣飯沼龍夫 京吉益周助	父岡部良貞	父花田恕助	野村泰順	*浅野春道	沼波周達	養父松枝春江	父岡田正弼 濃州河田大○	*浅井平之丞 永野徳元 神波首七	喜多川隆先	浅野良輔	竹野正卓	父西山玄道	岐阜堀川三徹	源中西橋造 濃州河田主計	浅井平之丞 平野春策
金外本		金外本	本外		口中	本				本	本	本	本	本	本	古医方	外針		小

124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107
山田貞元(五)	渡辺宗平(五)	水野礼蔵	山本佳一(五)	伊東春甫	渡辺正平(三)	渡辺見随(四)	和田東一(二)	神波瑞仙(三)	西村周景(三)	神波改庵(二)	沼波周吉(三)	永坂周輔(三)	山本太一(五)	御塩春章	服部玄作	竹内俊二(四)	喜多川佳一(三)
山田貞石	知多郡西瑞村医師 小田隆作	知多郡常滑奥条村 平左衛門	知多郡緒川村医師 水野東易	中嶋郡串作村 藤十郎	門前町 九兵衛	渡辺周安	知多郡大野村 林隆輔	西村逃玄			沼波仲達	永坂周二		伊勢屋六兵衛 藤町	富永又八郎家来 服部領蔵	竹内寿山	喜多川隆先
文化十四入門 文化七 文政九 立	文化十入門 文化元 文政六 立	文化八 文政二 文政四 立	文化四入門 文化十三 立	天明七 文化四 立	享和二 文化九 立	文政八 文化十四 立	文政六 文化十一 立	文政二 文化十 立	文政八 文化六 立	文政八 文化六 立	文政七 立	文政八 立	文政七 立	文化元入門 文化十 立	文化元入門 文化十 立	文政六 立	文政六 立
山田貞石 京 香川太冲	浅井平之丞* 紀州花岡隨賢	船橋貫道寄宿 京 賀川玄岱	同郡柴田龍淳 山本太一寄宿	同郡木全玄英 加藤正庵	渡辺玄二	父渡辺周安	父林隆輔 京 林立見 養父和田桃仙 河合秋山	養父神波瑞仙	兄渡辺周意	養父神波船樹	浅井平之丞* 永坂養二	父沼波仲達 父永坂周二	若山東庵 祖父山本太一	村井春岱* 小鹿淳庵	本多春承	父竹内寿山	浅井平之丞* 父喜多川隆先
本本	外金	産	本				本		本小	本小	本外	本外金			本		

146	平登門	廣井祢宜町 平八	文化三入門 文化十二卷人立	岩田公澤	本外
147	東方令達	濃州中嶋郡東方村 武右衛門	寛政八入門 文化六卷人立	起宿八木良慶	本外
148	馬嶋慶元(色)	馬嶋大智坊	文化五 文政三卷人立	父馬嶋大智坊	眼
149	玉井貞二	伊勢山田下館町 玉井曾平	文化三入門 文化八卷人立	永坂養二 関春水	本外
150	山田主水	愛知郡赤池村 七右衛門	文化二入門 文化六入門 文化十一卷人立	浅井平之丞 河田東作	本
151	川田友齋(二)	川田勿当	文化九 文政四卷人立	浅井平之丞 江馬春齡 父川田勿当	本
152	桜井祐二(二)	桜井桂二	文化九入門 文化十一 文政四卷人立	父桜井桂二 吉田玄寛	本
153	石井桃山	御中間頭松田茂平組 寺田市之右衛門	文化四入門 文化五 文化十四卷人立	井深玄碩 石井隆庵	本
154	中川順二(二)	中川順二	文化十二入門 文政三入門 文政七入門 文政七卷人立	父中川順二 大鶴活庵 吉雄常庵	針
155	服部昌元(七)	服部松齋	文化十入門 文化十二入門 文政三入門 文政七入門 文政七卷人立	加藤常仙 浅井平之丞 父岡田正弼	本
156	岡田文仲(三)	岡田正弼	文化十入門 文政六卷人立	山崎專三	本
157	熊沢強二	御先手物頭加藤定左衛門組 熊沢小右衛門	文化十入門 文政六卷人立	*吉田玄寛	本
158	佐々木春達	濃州本巢郡穂積村 庄左衛門弟	寛政五入門 享和三卷人立	*勝野現喜	本
159	河野善良(七)	河野善良	寛政九卷人立	新美慶翁	本針
160	木村一得	木村新一郎	文化七卷人立 文化十一入門 文政六卷人立	柴田洞元	本小
161	本田道碩	山吹儀兵衛家来 本田忠右衛門	文化十三入門 文政八卷人立	中西橋造	本針
162	碓氷武之進	碓氷軍吉後室清照院	文化三入門 文化十入門 文化十四卷人立	*一ノ宮森太仲 並河芳寿	本
163	長尾左仲	末広町 木屋左助			本外

184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	
山田台輔(三)	梅村玄芳	林 道榮	加藤貞元(二)	平野道元	矢野仙二	野村連二(二)	伊東主斗	宇都宮常元(三)	井上立安(五)	菊川尚慶	岡山良貞(二)	永井謙齋	浅野泰二	石川泉吾	土屋周輔	加藤玄意(二)	山田泰淳	岡林龍達(四)	伊佐松山	大橋台山	
山田春甫	富八 愛知郡野田村	濃州羽栗郡柳津村 茂兵衛	加藤良策	平野有助 百人組同心	御徒格小普請 矢野只四郎	野村泰順	東田町 伊東春甫	宇都宮尚山養子	井上専庵	成瀬織部家来 館野分七	岡本杏雙	愛知郡荒井村 永井定右衛門	吉藏 愛知郡一色村	善吾 伝馬町	御先手組同心 小出喜右衛門弟	加藤導意	遠山敷負家中 山田貞太郎弟	岡林龍達	竹腰山城守家中 伊佐七十郎	栄出町 重右衛門	
文化十二入門 文化十四入門 文化七入門	文化十入門 文化十三入門 文化六卷人立	文化九入門 文化六卷人立	文政二入門 文政六卷人立	文化十三入門 文政十卷人立	享和十二入門 文政十卷人立	文化七入門 文政三卷人立	文化四入門 文化七入門	文化十四入門 文政九卷人立	文化九卷人立 文化十四入門	文化八卷人立 文化十二入門 文政九卷人立	文化八卷人立 文化一入門	文化九入門 文政三卷人立	文化七入門 文政三卷人立	文化九入門 文政四卷人立	文政元卷人立 文化九入門	文化十三入門 文政八卷人立	文政八入門 文政八卷人立	文政五 文政八卷人立	文化十 文政五	文化十一入門 文政五卷人立	文化八入門 文化八入門
箕浦祥卓 神波瑞仙 父山田春甫	八木養碩 神波首七	同村伊藤俊司	父加藤良策 浅井宗達	竹野正卓	*浅井道順	永坂養二	長東宗元 父伊東春甫	丸淵仲山	丸淵仲山	菅屋順詮	父岡本杏雙 菅屋順詮	神波瑞仙	同郡梶原東平	八木養碩 児島倍之丞	京 沢田良達 神波瑞仙	*吉田玄寛	勝田三雪	神波瑞仙	*山碕菜茹翁	澤田喜安 高科存敬	
本小	本小	本	本針	本	本	本外金	本	本	本	本小	本小	本小	本外金	本外金	本小	本	本針	本小外	本	本針	

207	稻生三省	志水池町 文右衛門	文化七人門 文政五老人立	浅野春道*
206	尾頭定庵(二)	尾頭中書	文化九人門 文政五老人立	沼波橋翁 沼波仲達
209	小島金吾	愛知郡高畑村 小島鹿内	文政五老人立 文化六人門 文政五老人立	花田恕助
210	木村僊齋	愛知郡下一色村 權左衛門	文政五願	京 吉益周助 大鶴活庵
211	金子真一	赤塚町 こと	文化十人門 文政六老人立	浅井宗達
212	佐藤元二(二)	佐藤元二	文政六老人立	宮田隆輔
213	春木宗碩	海東郡東条村 紋右衛門	文政六老人立	浅井平之丞*
214	鈴木景山	門前町 喜平	文政六老人立 享和元人門 文化九老人立	長束宗元
215	安田春作(二)	濃州海西郡大和田村 安田春亭	幼年 文政六老人立	父安田春亭 京 加藤道一 大鶴活庵
216	佐藤玄仙	成瀬隼人正家来 佐藤利平	文政十人門 文政六老人立 天保六老人立 文政八	林昌庵 菅屋順詮 馬嶋大智坊
217	横井良策	樽屋町 喜作	文化七老人 文政七老人立	服部玄策
218	栗木東二	広井村 佐兵衛	文化七人門 文化十二人門 文政七老人立	田島養元 田中倉吉
219	佐々木龍石	日置旅籠町 米屋与吉	文化八人門 文化十一人門 文政七老人立	*柴田龍溪
220	鶴見玄橋	伝馬町 助藏	文化八人門 文化十一人門 文政七老人立	岡崎浅見朝三 勝幡大江長周 大鶴活庵
212	八木立二(二)	押切村馬喰町 大柳元真	文政六老人立	父大柳元真
222	大石代助(二)	大石隆助	文化十一人門 文政六老人立	父大石隆助
223	近藤泰順	新町 藤屋与兵衛弟	文化七老人立 文化十人門 文政七老人立	松枝春卿
224	鈴木玄詢(二)	鈴木春東重信	文化元年人門	父鈴木春東 江戸高野香養
225	後藤儒六	不天	文化十三人門 文政八老人立	神波瑞仙
226	野田順貞	赤塚町 清吉	文化十四人門 文政九老人立	菅屋順詮

本
本針

本

本針

本外

本外金

本小
眼

本小
針
本小婦

本外

本

本

本
本本

本小

227	戸川 鼎	鉄砲塚町 戸川勿当	文化十四入門 文政九卷人立	菅屋順詮	
228	奥田文常	今村門藏	文化十四入門 文政九卷人立	菅屋順詮	
229	伍明天助	丹羽郡五明村 周右衛門	文化十四入門 文政二	同郡有馬元良 京川越佐渡介 安芸良平	本外
230	林 宗二	海東郡津島 伝右衛門弟	文政九卷人立 文化十二入門 文化十六入門 文政七	加賀文匡 津島大橋周二 津島松原章碩	本針 本本
231	鈴木礼助	知多郡北方村 修驗多門院	文化十二入門 文政九卷人立	神波船樹	
232	加藤文敬	西鍛冶町 藤兵衛	文化十四入門 文政九卷人立	河合秋山	
233	野村勝治	下七間町 源兵衛	文化十一入門 文政九卷人立	野村立栄	本外金
234	高木元恪	中嶋郡阿古井村 長左衛門	文化十一入門 文政六卷人立	神波船樹	本小
235	岡田宗順		文政八入門 天保四 天保五卷人立	*賀嶋道圓 大久保修治	
236	井上仙助		天保五卷人立		本外
237	江崎春齡				外

医師名下の()内の漢数字は医家としての代を示す。師の上の年号は師への入門年を、入門と明記しない場合もおそらくその年が入門年と思われる。吾人立年はその上に年号で示した。師との関係はその頭に父、伯父、養父などで示した。師の居住地が名古屋以外の場合にはその前に地名が記してある。京、江戸、大垣、岐阜、岡崎、津島、一ノ宮、起宿はそれぞれ今の京都市、東京都、岐阜県大垣市、岐阜市、愛知県岡崎市、津島市、一宮市、尾西市の内である。101の下小田井は愛知県海部郡西枇杷島町、220の勝幡は同郡美和町の内である。師の居住地が弟子と同じときは同郡、同村で示した。駿州、丹州、紀州、濃州、三州はそれぞれ駿河、丹後、紀伊、美濃、三河の国である。出身地が尾張国以外はその国名から、尾張国内は郡から、名古屋は町から示した。名古屋在住の医師には出身町村の記載がない。*は尾張藩医である。解説できなかった文字は九印で示した。

Physicians during the Tempo-Period in Nagoya

by Kazunobu YAMAUCHI

The physician's list prepared by Dr. Ryuei Nomura in 1834 was analyzed and the following items were investigated; ① physician's lineage (physician, farmer, merchant, warrior class, etc.); ② their masters; ③ training period; and ④ clinics. Fifty-three % of the physicians were from a physician's family, and the others were from farmer's, merchant's and the lower warrior classes, indicating that physicians wanted to make their own successors.

Most physicians studied in Nagoya and some studied in Kyoto. The mean training period was 10.4 years, and 70% of the trainees studied from 9 to 12 years to be a physician. Most of them (95%) studied medicine, 27% surgery, 21% pediatrics, 11% acupuncture, and 5% obstetrics and gynecology. Very few studied ophthalmology, oral surgery and Dutch learning. The present study clarified the medical situation in Nagoya at the end of the Edo period when western medicine had not yet been introduced to Japan.